第Ⅲ部

追 悼 集

御会葬礼状

故　母平田正代は昭和14年11月６日に生をうけ、82歳で永眠しました。

母はいつも自分の事は後回しで、常に世の為、人の為に人生を捧げて来た人生だと思います。

生前は国際福祉相談所のケースワーカーや家庭裁判所の通訳、沖縄語学センターで同時通訳の講師、てぃるる女性相談室、沖縄社会福祉専門学校講師などバスとタクシーを乗り継ぎ、東奔西走していました。

困っている人がいたら自分の身を削って助ける「私が助けなかったら誰が助けるの？」が母の口癖でした。

「もうたくさん税金も納めたし、社会貢献もいっぱいして来たから残りの人生は、その恩恵を受けていいんだよ。少しでも身体に異変を感じたら病院に行こうね」と言っても母は「いいの、もっと困っている人がいるから私は大丈夫」と言われました。

終活まで人に迷惑をかけない様、この葬儀も生前に全て決め予約までしていました。ここまで来ると感心するしかないです。

母は生きるのが下手でした。でもそれが母でした。そんな不器用で真っ直ぐな母は僕達の誇りでした。皆様の心の中で元気で笑顔の母が生き続けたら嬉しいです。

これからも困った時は天国からでも手を差し伸べてくれますので声をかけてみてください。

生前お世話になりました皆様へ深く感謝申し上げます。

本日はコロナ禍にも関わらずご参列いただき誠にありがとうございました。

令和４年４月26日

喪主　長男　平田マイケル忠義

二男　平田パトリック龍

追　悼　文

弟　平田　龍一

正代は、弟の私が言うのもなんですが、尊敬に値するいい姉でした。客観的に物事を見、公平・公正に判断し対処する性格でした。

自分の腹を痛めた子だから可愛がる、という考えは間違っている、自分の子でなくとも、どの子に対しても優しく思いやりを持って接するべきだ、と常々話してました。

1960年姉が早稲田大学在学中、安保条約反対の学生運動が全国的に盛んで、姉も東京でデモに参加してたようです。

当時デモに参加していた東大の女子学生が死亡するという世間から注目された事件もあり、心配した父親から、デモには参加するな、と言われ大喧嘩していたことを覚えています。

大学卒業後、米軍基地内で通訳の仕事をしていましたが、数年後米国留学し、１年で髪の毛が真っ白になって帰国したので、アメリカの大学への留学は、勉強好きな姉にとっても相当ハードだったんだなと思いました。

帰国後、以前基地内で通訳してた時知り合った米軍人が退役してたので、結婚し二人の男の子を授かりました。（残念ながら後に離婚）

女の子は可愛くて好きだと言っていた姉はガールスカウトのリーダーも楽しく務めてましたが、キャンプやハイキング等のスカウト活動で、色白だった姉が日焼けして真っ黒になり、その後肌は元に戻りませんでした。

姉は早稲田大学第一文学部英語学科卒で、元首相故小渕恵三氏とは同級だったそうです。小渕氏は早大雄弁会の先輩平良哲氏（元県議）や同窓の友人を慕って、沖縄によく遊びに来られたと姉が話してたのを記憶してます。

二十世紀末ブセナテラス、万国津梁館が竣工し、沖縄に思い入れがある小渕首相が2000年サミット開催地を沖縄に決定し、守礼門をデザインした二千円札を新たに発券させました。残念ながら小渕氏はサミット開催前に他界しましたが、この沖縄サミットこそが、今日の沖縄観光を飛躍的に発展させる礎となりました。

国際福祉相談所では、国際結婚や離婚、無国籍児等米軍基地から派生する様々な問題解決に奔走する傍ら、裁判所で、米軍関係者が引き起こした様々な事件の、刑事裁判や民事裁判の通訳も務めました。

姉には色々苦労もあったと思いますが、二人の息子も順調に育ち、それぞれに孫も授かり、姉は一応自分がやりたいことをやりとげた悔いのない人生を歩んだと思います。天国で安らかに過ごし、これからも沖縄をそして家族を見守り続けるものと思います。

令和４年12月

姉　正代のこと

妹　平田　由美

大きな壇飾りのお雛さまと写っている姉の初節句の写真。お雛さまは、戦後東京から沖縄に運ばれ、私が小学生の頃、学校から我が家へ雛まつりの見学会があった。

両親に大切に育まれた正代、仕事をリタイアした七十歳の頃、「自分は子供の頃から皆に可愛がられて育ち、仕事も充分したし、現在も素晴らしい友人、知人に恵まれているので、あまり人生に思い残す事はない」と達観したように話していた。

コロナ禍の中も、県外から姪ファミリーが毎年ステイしていたし、翻訳講座の受講生だった方達、その他親しい方々と会うのを楽しみにしていて、ホームヘルパーの方から「外出の予定があると活き活きしてますね」と云われたそうだ。

本人はここ数年間、入退院を繰返し満身創痍の状態だった。人に迷惑をかけたくないという思いが人一倍強く、痛みに耐え、骨折してもすぐ病院に行かず、息子や私達妹弟にも伝えず我慢していた。最後の入院の日、救急車の到着前、「私は施設には行きたくない」と必死の思いで訴えていた。一人で日常生活を維持できないならもういいとの強い思いからだった。

最後の入院ではとうとう退院できなかったが、正代はそれまでの自立した生活をまっとうしたのではないかと思う。

平田家の要の長女として、皆から頼られ、家族、親戚、その他友人、知人からも相談事が多く、自分の全知識、ネットワークを総動員し対処。仕事でケースワーカーとして問題解決にあたるが、プライベートでも同様だった。

正代の親友の一人から「正代さんの友達であることは私達の誇りでした」とうれしい言葉をいただいた。

国文科への進学を考えていた姉に、英文科をすすめたのは父だった。外国生活が長く、語学力、国際的知識があり、父を越えることはできないと姉は常々云っていた。

早稲田大学で箏曲のクラブに入り、和服を着る機会も多く、成人式に父から人間国宝の与那嶺貞さんの読谷山花織の帯を贈られた。

父の厳しさ、強さ、母の優しさを合わせ持つ姉は、家族、実家をとても大切に思っていた。家族のことでは次男が平田姓になり、令和元年に孫の男の子が誕生し喜びが増え、人生色々あったが、思い通り生きられ、良き人生、ハッピーなフィニッシュだったと思う。

正代姉の想い出

従兄弟　福村　圭司

2022〔令和４〕年の３月頃だったと思われますが、東京の２、３のテレビ・キー局の番組で、正代姉の長男のマイケル家族がハワイ・ホノルルの現況をリポートする番組があって、孫娘の中学生のミシェルさんがリポーターを務めていましたが何とその仕草や顔立ちが、正代姉の娘時代を彷彿させていました。DNAの成せる技か、孫娘に見出した次第です。

正代姉は東京都で出生し、小学校２年生迄中野区で育ち、1947〔昭22〕年12月に家族の沖縄への引越で、父親が那覇市松川に家を構えましたので、大道小、真和志中、那覇高へと進み、早稲田大学第一文学部英文学科へと進みました。本人は国文科を希望したらしいが、父親の薦めもあって英文学へ入ったと話していました。それにはわけがありました。父平田忠義は1920〔大９〕年19歳の沖縄師範学校３年の時に、寄宿舎の「当番日誌」で、学校を批判したとの理由で、当時の時世で「危険思想学生」と見做されて「退学処分」を食らって仕舞ったようです。いずれはニューヨークかロンドンに渡って勉学したいという強い願望を抱いて、ペルー・コスタリカ・メキシコと青年時代を過ごし、ニューヨークやロンドンの夢は遺えて仕舞ったので、その夢を娘に託したかも知れません。

早稲田大学の卒業間際に琉球政府のリクルーターに沖縄に戻って琉球政府の裁判所就職を薦められたが、その方向には行かず、後に裁判所の仕事と巡り合うことになったのは不思議な縁だと話していました。卒業後は直ぐに沖縄へ戻らず、早稲田大学の図書館に就職し、その後沖縄へ戻り、アメリカ民政府に就職するも毎々日翻訳に明け暮れて詰まらない様子でした。その内普天間のUSO（米国慰問協会）へ転職し、その内米留試験に合格し、ニューヨーク州立バッファロー大学に入学し社会福祉課程を履修し、沖縄に戻って米国で学んだ社会福祉の専門家として駐留米国軍人・軍属との間に起きたあらゆる相談に一生懸命取り組むようになりました。話によると、通訳、手紙の翻訳、行政手続、人生相談、法律相談、調査等について薄幸な女性達を手助けする事に邁進したようで、その時々の文通によって垣間知りました。米国留学前にUSOで知り合った米国ニューヨーク出身のマイケル・D・ケリーと首里崎山の王朝時代に茶屋御殿の跡地に建つカトリック教会で華燭の典を挙げ、夫君の勤めていた不動産投資会社ユニバル・インベストメント（Unival・Investments・LTD）のフィリピン・マニラ市の事務所赴任で一家はマニラ生活も経験している。沖縄での無国籍問題と同様にフィリピンでは戦前での日本人父親とフィリピン人女性との間に出来た無国籍フィリピン人の問題も話し合った事がありました。それに終戦後には駐留米軍属として多勢のフィリピン人が駐留していてフィリピン系の無国籍者が存在は無いだろうか、個人的には危惧します。

正代姉の取り組んだ、戸籍法の改正には縁者としてとても誇りに思っています。

古い話になりますが、1985〔昭60〕年１月３日に改正国籍法の施行で12歳の無国籍少女が第１号の日本国の戸籍を取得者となったと葉書でその報告を受けた時は私も胸が熱く感動がこみ上げて来ました。

〔PS〕正代姉とはご本人の病気の事、ウーマンリブの事、英国文学のブロンテ３姉妹の事や政治家候補に幾度も勧誘された事、妹に誘われて俳句の世界に足を踏み入れた事等の思い出が在ります。

平田正代さんを悼む

救われた多くの女性

高里 鈴代

平田正代さんの取り組みで特筆されるのは、沖縄の「無国籍児」の問題を発信したことだ。

1981年に発効した国連の女子差別撤廃条約を批准するに当たり日本が解決すべきことの一つに国籍法問題があった。

当時の日本は、生まれた子どもは父親の国籍に入る「父系血統主義」だった。

一方、米国は出生した国の国籍を付与する「出生地主義」だった。

駐留米軍人・軍属と、沖縄の女性との間に生まれた子どもは、両国の制度のはざまでどちらの国籍も得られないことが問題となっていた。

83年に政府が聴聞会を開いた際、当時国際福祉相談所長だった島本幸子さんとケースワーカーの平田さんが出席して実態を報告した。

国籍法が改正され、子どもが母親の国籍に入れるようになった。無国籍児が救済できたのは彼女の頑張りも大きかった。

97年、東門美津子副知事（当時）を団長とした女性訪米団に私と平田さんも参加した。平田さんは、夫が米国に戻り除隊後、沖縄に残された妻子が夫の居住先を追跡できない問題を指摘し「日米政府は個人の問題としているが、彼らは軍人として沖縄に来たのであり、解決の方法を見いだすべきだ」と訴えた。

困難にぶつかる女性を支援するため、あらゆる法律を駆使した。いろんな仕事をしたがそれをひけらかすことはなかった。「特別なことはしていない。給料をもらい、しなければいけない仕事をしただけだ」と語る控えめな姿勢が印象に残る。

彼女の存在で助かった女性は多かったと思う。彼女の働きを知り、今も続く問題に対応する人が出てきてほしい。

（談、強姦救援センター・沖縄代表）

（29面に関連）

2022年5月20日（琉球新報　朝刊）

国際福祉相談所　元相談員　瀧岡　直美

無国籍児の解消に奔走

平田正代さんを悼む

瀧岡直美さん

国際福祉ケースワーカーとして、長年にわたり国際カップルの結婚や離婚、子の国籍、養育費の問題などに取り組んだ平田正代さんが4月22日、亡くなった。82歳。2度の改称を経た後、1998年に40年に及ぶ活動に終止符を打った国際福祉相談所で、平田さんは最後の所長を務めた。かつて平田さんの下で働いた元相談員の瀧岡直美さん(70)が、平田さんへの思いを寄せた。

◇　◇

平田正代さんと言えば80年代前半、国際福祉相談所の初代所長などを歴任した島本幸子さんと二人三脚で沖縄の無国籍児問題に奔走した功績が挙げられる。

米軍の沖縄占領に伴い、米国人と沖縄女性の間に生まれる子どもが増えた。一方で当時の国籍法は父親の国籍を優先させ、母親の国籍を継承できない父系優先血統主義だったため、父親が所在不明になるなどして国籍を取得できない子どもの存在が社会問題化した。

男女平等の父母両系血統主義を掲げ、85年に施行された改正国籍法は多くの方々の尽力があって実現したが、中間試案に関する国の審議では、お二人が沖縄の実情を訴えるなど大きな役割を果たした。

県内女性団体のリーダー格で、対外的な発信にたけていた島本さんに対し、平田さんはブレーンとして実務的な作業を担い、島本さんを支えた印象がある。とはいっても陰の人という訳ではなく、要所では表に立ってしっかりと主張した。

国際福祉相談所時代の平田正代さん（右）と瀧岡直美さん。所長と相談員の立場で複雑多様なケースに共に向き合った＝1990年代後半、宜野湾市（瀧岡さん提供）

米国留学の経験があり、法廷通訳を務めるほど英語が堪能で、米国の法制度にも精通していた。自分にもスタッフにも厳しかったけれど、フォローも忘れない心の温かい人。専門性を磨き続けた平田さんだからこそ解決できたという、深刻で複雑なケースがいくつもあった。

私自身は国際福祉相談所が閉まる前年の97年に相談員を退いたが、閉所時の資料整理の際には再び平田さんに駆り出された。相談者の個人情報が入った膨大な書類を、平田さんたちと焼却施設へ持ち込み、煙突から煙が出るまで見届けたことも思い出深い。その後も長く、相談支援の現場で活躍された。たいてい自分のことは後回しで、2人の息子さんたちへの口癖は「私が助けなかったら誰が助けるの？」だったと聞く。

基地があるがゆえに沖縄では今も、とりわけ米軍関係者との国際結婚を巡るトラブルが後を絶たない。二つの国のはざまで苦しむ女性や子どもたちに寄り添ったパイオニアとして、平田さんの歩んだ人生がより多くの人たちに語り継がれることを心から願う。（談）

1985年5月24日（沖縄タイムス　朝刊）

国際児と共に歩む「月よりの使者」
（平田正代様）

高良　邦雄

第一部　国際福祉相談所の平田正代氏

一、私と平田正代氏との出会い

私が大学を卒業し、国際福祉相談所に就職したのは1975年の３月である。

彼女は既に指導課長職にあり、同相談所の中心的かつ不可欠な職員として沖縄県が抱える基地存在から派生する米軍人及び日本女性との間に出生した子供達の無国籍の問題とその子を育てる母親達の心理的苦しみ、悩み、経済的貧困という深刻かつ困難な問題の解決・支援に直面していた。

かかる諸問題解決、支援の先頭に立っていたのが彼女であり彼女の実践ぶりを眼のあたりにしたとき、私自身の力の弱さを強く覚まさせ、更なる再学習の必要性を自覚させたのが彼女の力量であった。

二、平田正代氏の退職と再会

時は流れ、二代目所長に島本幸子氏が任命されたのは1982年であった。その時に、私に島本氏を紹介して下さったのは平田正代氏であった。島本氏と平田氏は相互の力量をよく知りつくし、強い絆で結ばれていることが直感できた。

その数年後に平田氏は家庭の都合で外国移住のため大変惜しまれながら退職した。

更に数年後、島本氏から私に会わせたい人がいるので、首里在のAホテルのロビーへ来てほしい旨の依頼を受けた。そこには島本氏と談笑している女性が同席していた。おどろいたことには思いがけない平田正代様でした。

話によると彼女は体調を悪くし、やせほそり、病状回復を目的に帰沖したとのことであった。

島本氏の話の要点は国際福祉相談所への臨時職員としての再雇用であった。彼女は相談所の職務について万能であり、また不可欠な人材でもあり大きな喜びでもあった。

彼女は数か月で体調を回復し元の彼女に戻り仕事は大幅に進んでいった（今、ふり返って見て神様の導きではなかったのだろうかとふとそのことが頭をよぎった）。

数年後、島本氏は国際福祉相談所の所長を辞任、国際福祉会トップの座である理事長に昇任し、平田氏はその後継者として国際福祉相談所の所長に任命された。

三、平田正代氏と誇り高い国際福祉相談所の閉所

平田氏は国際福祉相談所の入所前に早稲田大学を卒業し、米ニューヨーク州大学バッファロー校の留学後に同相談所の前身である国際社会事業団沖縄代表部の始点から現在の相談所の閉鎖まで活躍し働き続けることができたのは彼女一人である。

彼女の独特な相談支援方法は、彼女の高度な専門的知識･技能のみで相談依頼者（クライエント）の問題を一人で解決することではなかった。支援の実行前に、充分な時間を設定し、クライエント

（親子）の悩み、願い、希望を忍耐強く、ていねいに聴取することを欠かせなかった。その後に同僚、上司等との意見を取りまとめ、総合的情報を統一し、問題の主要因を把握し、関係職員と協働して支援方針、支援計画を策定し、それに従って実践した。その手法は上司、部下等からの強い信頼を取り寄せる基となっていた。

一方、当相談所の運営費は極めてきびしく赤字財政が長期間続いた。島本理事長へ（他の理事も含む）と平田氏は財政的な困難も乗り越え、無国籍の子どものために改正国籍法の施行に大きな役割を果たすと共に恵まれたすばらしい部下と一緒に国際福祉相談所の役割に終止符をうつことができた。それを裏づけるように県内の社会では、既に国際児の偏見、蔑視等の負の要因は全くなくなりすべての県民と国際児はお互いを同じ人権を保持した人間として尊敬し合い、協働で生きている社会が確立していると言える現状にある。

小結びとして、神はこの世に平田正代と島本幸子という人間を送りだした。二人は相互の深い信頼と愛情に強く結ばれ、ハーフと呼ばれる子供（国際児）とその母親達を助けだすと共に沖縄県民の人権を尊重し、差別を許さず協働して生きてゆくゆるがない沖縄県民の心の強さを全国及び世界に証明することができたと確信する。

第二部　平田正代氏と美さと児童園

一、平田正代氏と研究室

美さと児童園には「施設及び地域児童福祉相談研究室」がある。その構成員として、室長に福地孝氏（沖縄女子短期大学教授、その後の学長）、知念仁幸氏（臨床心理士、元沖縄県教育庁の義務課長）、幸地清祐氏カウンセラー（元中頭教育事務所長）、伊佐松子氏（沖縄少年院篤志面接連合会会長）、中村実明氏（沖縄命の電話の室長）、座間味宗春氏（沖縄国際大学教授）、真境名光氏（弁護士）が全くの無料奉仕で選任された。

美さと児童園は社会福祉法人国際福祉会の一事業所である。設園前には国際児の受入れも積極的に行なわれ、常時約10％程度の国際児の入所が見られた。次記の事例に見られるように国際児の対応は一般家庭の児童とは少々相違する問題点がよく見られた。私は彼等の対応に平田氏を想定した。しかし彼女の自宅は那覇であり（彼女は運転免許証の保持者ではない）、当園所在（知花）までは遠距離である。加えて、当研究室の相談時間は午後七時から午後九時までとなっている帰宅の遅さがはっきりしていたためお願いをためらっていた。その矢先に平田氏から相談研究室へ協力したい旨の言葉があり喜んで彼女を研究室へ迎え入れた。

その後の国際児の問題は解消され、その他の園児が平田氏を指名し相談をお願いする女子園児が多くなった。

二、平田氏を研究室へ招いた理由（事例）

事例（一）　黒い肌の色を軽石でこすり消そうとする小学一年生の女の子（黒人系の国際児Aさん）

学校から帰宅し、ランドセルを背中に抱えたまま園玄関前の水道から水を出し彼女の腕の表面に流し続けているのを事務所内で気づきその場にかけつけて見た。本児は右手に軽石をもちその軽石

で、目には涙を流しながら腕表面の皮膚を強くこすり続けているのである。「どうしたの」とたずねると、「クラスの子供達がお前の顔、腕足の色はなぜ黒いの、イヤな色と言い続けられた」と答えた。

私はその子供をなだめ、女子職員へ心のケアをお願いし、その足で学校を訪問し、国際児や児童養護施設入所児の状況を話し理解をお願いした（当時は養護施設の理解は乏しく、南部地域で新しい養護施設の建設に対する地域住民の強い反対運動で拒否されやむなく他の地域でやっと建設することができた事例もある）。

事例（二）自己同一性確立の時期のある白人系の国際児（B君）

身長は１メートル70位で細い身体に赤髪であり、顔形も目の色も白人そのものである。母親は沖縄の男性と再婚し３、４歳の子供を３人産んでおり子育てに大変多忙な状況にあった。B君は身体の大きさにかかわらず心のやさしい少年であった。家族と一緒に住まない理由として、自分は家族全員と全く違うので別の生き方を考えているとのことであった。自己同一性確立の時期に直面していたと思われる。

その後園をとびだし、約３ヶ月間の行方不明になった。私はその間、毎週土、日（自己の休日）の午後４時から午後10時頃まで本児の捜索を続けた。やっと見つけた場所は当園から約40キロ位離れた実家市内にある６階建てのビルの屋上の片隅で住んでいたようである。

赤い髪は伸び放題、食事も不良でやせこけて、またフロもはいっていないので車中には本児が放つくさいにおいが充満した。

当初は見つけても逃げだされるのを想定し当時のA担当職員に同行をお願いしてあった。

しかし、本児は逃げる気力もなく静かに園にたどり着いた。

事例（三）トラウマを抱えた白人ハーフの女子中学生（Cさん）

本児は身体もすんなり高く美少女でモデルにもなりそうなかつ学力も普通以上の子でした。３歳下の男の子（弟）は日本人男性との子であり母親と住んでいました（母子家庭）。

ときおり（C）児は園庭で何かにおそわれたように身体を左右に揺らしながら、耳をふさいだり、髪を散乱させてそのまま気を失うことがよくありました。これは家庭内虐待の後遺症と言われその改善は極めて困難なケースでした。

以上のようなケースが多々ありましたが国際児の問題に直面する毎に平田氏を思い出し当研究室への参加を考えていました。

三、平田氏が加入した研究室の成果

同研究室は私が総務課長職にある1987年の９月１日に、当時の伊佐眞徳園長の許可を得て設置したものである。前に紹介した如く、室長福地孝氏（沖縄女子短期大学・学長）をはじめ、申し分のない立派な専門家達が協働して家庭に恵まれない子供達の幸福を願って、毎週木曜（夜の７時から夜の９時まで）に子供達の心理、行動、社会性そして自立支援のために専門的に長期間忍耐強く協働して取り組んでくれました。お蔭様で目に見える大きな次の成果が現れました。

（一）平成17年５月、九社連児童養護施設協議会発刊の中には美さと児童園の大学、専門学校等へ

の進学率が最も高い結果で表彰された

（二）卒園時（退園し社会的自立）には進学準備に必要な「奨学金」、社会的自立に不可欠な自動車運転免許取得の経費授与「証明書」が島本氏（自立支援奨学金支援会顧問）から退園者全員に手渡された。これらの支援金の源泉は地域の個人、企業、団体からの寄付であり、理事及び理事等の呼びかけの結果でもある。特に多額の寄付をしてくれたは宜野湾在アメリカンエンジニアコーポレーションの社長のロバート・エクススティーン氏である。彼はまた平田氏の親友でもある。

（三）第二二回児童養護施設スポーツ大会のサッカーの部で見事八年連続の優勝を果たした。

園児達は野球の部では沖縄県代表として九社連児童養護施設野球大会に出場した。

この優勝は施設関係全員の支援のお蔭と言えるが特にこの連続優勝に寄与した方を紹介しておきたい。

四、平田正代氏と山内彰氏の講話との関係

山内氏は沖縄県中頭教育事務所の所長として就任以来、そして沖縄県教育長に就任後も園児達との継続的なふれあいの機会を設定した。特に園児達が卒園（18歳以上の退園・社会自立）時及び沖縄県児童養護施設等スポーツ大会の優勝にかかわらず、選手全員を市内在の（H）レストランで夕食会を兼ねて雑談そして特別な講話をしてくれた。その交流が園児達の自尊心、肯定感（自信）を高め日常生活の中で意欲と努力によって学力の向上、行動（スポーツ大会での八連覇、チームワーク賞）の原動力になったことが推測できる。

平田氏が山内氏の講話によって変化する園児達の表情に強い関心を引かれた。平田氏が面談し続けてきた園児（担当児童）達の成長が表情の変化からわかるようだと大変嬉しそうに話し続けていた。平田氏の引き受けた子供達の成長ぶりも主観だけでなく子ども達の行動、表情等から直接観察によって評価し、安心する姿にはさすが平田さんと感心させられる一面もうかがえた。

その後、山内氏は子供達の外国旅行を企画し実現している（子供達の人生の大きな体験である）。

第三部　平田さんとのお別れ

平田氏が最も尊敬し、姉のように慕っていたのは島本幸子氏である。島本氏には特別な感情をもち、島本氏の話題になると笑顔いっぱいで声もはずんでいた。

しかし、島本氏の死後、島本氏についての話題が少なくなり、私も彼女に島本氏についての話をどこかで遠慮さを感じ自分でも不思議に思えた。年賀状、暑中見舞いのハガキを通しての交流を通し約３年後に直接平田氏と面会することができた。その後は一年に一度の割合いである喫茶店でコーヒーを飲みながら会話をはずませ、楽しみ、午後５時には最寄りのバスで帰るのが常であった。

彼女の死の３ヵ月頃前に電話をかけると体調を悪くし入院していることを知らされた。面会を希望したが病院側から面会も贈り物もコロナを理由にシャットアウトされた。約一週間後に、平田氏から電話があり、元気で退院したことを知らされた。私の喜びを伝え、外出できるまで回復した時に、退院祝いに「食事会」をしようと提案したら喜んで承諾してくれた。

その数ヵ月後、新聞紙上で彼女の死を知りおどろきをかくせない自分に気づきました。彼女の死についてそして生きていた頃の想い出話を交わすことのできる人が思い浮かばず少し落ち込んでいた。その時に平田氏の親友であると名のる城田由美子様から平田氏の足音を継承しようとする沖縄大学の成定洋子教授を中心とする多くの有志グループが立ち上がったことを知らされ、ホッとし、それが大きな勇気と喜びとなりました（城田さんありがとう）。

私は常日頃から平田氏は沖縄県の国際児とその家庭を幸福に導く役割を付与され、この世に送られた月よりの使者だと考えていました。

今頃は先に亡くなられた島本様にあの世で迎えられ、きつく抱き合って喜んでいることでしょう。「正代、よく頑張ったね」ほめられてもいるでしょう。心を込めて「ご冥福をお祈り致します」。

追悼　平田正代さん

弁護士　池宮城　紀夫

去る４月22日　平田正代さんの訃報に接し、ショックを受けました。平田さんとは真和志中学、那覇高校での同期生ということで、また平田さんが東京の大学で勉学中も何かと付き合いがあったこともあり、その喪失感はひとしおです。

想えば、平田さんは、中学時代から群を抜いた秀才で、碌に勉強をしなかった私には気軽に近づけることが出来ない存在でした、かと言ってお高く留まっているのではなく、いつも礼儀正しく、笑顔を絶やすことのない人柄でした。

時がたち、平田さんは国際福祉相談所で国際結婚から派生する困難な問題を解決する仕事にかかわっていました。私は弁護士として基地問題にかかわってきましたが、とかく基地から派生する国際児の問題は深刻なケースが多く、沖縄社会全体の問題として解決すべきであるにもかかわらず、社会の片隅に追いやられていました。そのような苦境の中で生きざるを得ない国際児とその母らのために、親身になって働いていた平田さんでした。

1994年に開催された「全国母子寡婦指導者研修大会」でシンポジュウム「国際家族年とひとり親家庭」でコーディネーターを務められた平田さんはつぎのとおり発言をしています。「従来の母子家庭という言い方は固定的な概念をもっており、いったん母子家庭となった場合、引き続き母子家庭として頑張ることが期待されてきたように思われる。けなげな頑張るお母さんは、長い間家庭の専売特許と世間一般は考え期待してきた。そのような既成のお仕着せのイメージをかなぐり捨て、親にとっても子にとってもシングル・ペアレント・ファミリーの時が、長い人生の流れの中の流動的な一時期でありある意味では最も自由な時であるとの認識を持ちたい。」母子家庭の相談を担当してきた私にとって、何と自由で前向きな発想か！平田さんに改めて敬服した次第です。

平田さんのもう一つ、大きな貢献は、米兵関連刑事事件で、長年法廷通訳をされていたことです。難解な法律用語の通訳は誰でも出来ることではありません。裁判所で顔合わせる度に、彼女の大き

な存在を感じたものです。

平田さん　ほんとにお疲れさまでした、安らかにお休みください。合掌

正代さんのこと

平良　和子

高い知性と教養豊かな女性、それでいておごることなく、心やさしく、あたたかい人、それが正代さんでした。

正代さんと私は真和志中学校の同期生で、その頃、戦火を逃れた親達はふるさとの復興に情熱を注いでいました。それぞれの家庭で、郷里から出てきた後輩達を受け入れたり、心の拠り所になったりしていました。平田家も、多くの人達が出入りするご家庭だったようです。

社会人になって、同期10名で「いちもく会」として毎月集まることになりました。個性豊かなメンバーで、お互いの違いを認め合い波長のあった私達の集りは、結婚、子育てを経て、後期高齢者と呼ばれるようになった現在まで続いています。

正代さんは、沖縄のガールスカウト活動にも熱心に取り組まれていましたが、私も正代さんの勧めで、参加するようになった一人です。いちもく会の子ども達の多くも、スカウト活動を経験しました。正代さんのお母様がガールスカウトの役員をなさっておられたので、平田家姉妹には、日々の生活の中にガールスカウトがあったようです。

彼女がリーダーとしてスカウティングしてきたスカウト達は、正代さんを尊敬し繋がっています。お別れの式には、県外に住むスカウト達から送られた素敵なお花が供えられていました。

女性が自立をし、幸せな人生を歩めるようにと、正代さんは島本幸子先生と共に、国際福祉、ガールスカウト活動に身も心も尽くしてきたのです。

行政から「女性を副知事に」との声が上がった時、いちもく会のメンバーは、「チャイコ（正代さんの愛称）がいる！」と誰もが思ったものです。彼女は常に野にあって、国を動かし、解決の手立てが分からずにいる人達の力になって、まさしく忘己利他の人生を歩んできたように思えます。

プライベートなチャイコの一面では、クラッシク音楽が大好きでした。同じ興味の私や仲間と、ドミンゴ・パヴァロッティ・カレーラスの三大テノールの東京公演に行ったこと等、数々の演奏会の思い出があります。

卯年生まれで、「うさぎ」のコレクションをしていた彼女は、百を超えそうな可愛い世界のうさぎ達と一緒に過ごしていたようです。そのコレクションは、仲間の一人に委ねられました。

お悔やみに伺った際に、息子さんからお聞きした事ですが、体調を崩された時に、「これまで納税の義務も果たしてきたのだから、病院に行って使わせてもらったら」と勧めると、「私は大丈夫。もっと困っている人がいるはずだから」と答えたそうです。自分のことは、いつも後回しにする、そういう人でした。

いちもく会のみんながあちらに行った時は、きっとチャイコのもとで、会を続けていくことでしょう。

地に足の着いた仕事をした平田正代さん

おきなわ女性財団　理事長　大城　貴代子

平田正代さんを知ったのはいつの頃だったのか思い出せないが、亡くなられるまで年賀状は毎年いただいていた。

定年退職したら女性に関する活動をしたいと考えてた私は、夫の介護で退職を余儀なくすることになり諦めざるを得なかった。

そんな折、親友の垣花みちこさん（後のおきなわ女性財団の常務理事）が定年退職することになった。そこで、二人で「女性問題の研究所」を立ち上げようと相談したが、「そんなの無理よ」と断られてしまった。

これまで出会った多くの沖縄女性、パワーと逞しさを何かに残しておく必要を考えていた。これまでも個人的な人物史はかなりあったがまとまったものとしては、外間米子さん監修「時代を彩った女たち」と県が復帰50年に発刊した「おきなわ女性のあゆみ」があり、その続編をやってみようということになった。琉球新報社に企画書を出し50人の女性を紹介する連載が実現、その後「煌めいて女性たち」として発刊することができた。

幅広い分野で沖縄の発展を支えた100人の女性をリストアップし本人の承諾のもとに50人を厳選、私と垣花みちこ、渡久地澄子の３人で手分けをして執筆。その中で私は真っ先に平田正代さんを取りあげた。

「私のことを覚えていてくれてありがとう」とインタビューでの開口一番の一言が忘れれられない。いつももの静かで実業家のお嬢様育ちの先輩と思っていたが、私と同世代で東京の大学で在学中に「60年安保闘争」を経験し「地に足の着いた仕事」をしたいと痛感したとのこと。その後米国留学、帰沖後は米国民政府で働き、後の国際福祉事業団沖縄代表部にケースワーカーとして転職。以後米軍基地から派生する女性の諸問題に幅広く取り組んだという経歴をはじめて詳しくきくことができた。

取材は「女子差別撤廃条約批准」に向けて沖縄の「無国籍児の問題」を取り上げ国籍法の改正へと奔走し、「国連婦人の10年」運動へ大きな功績を果たしたことがメインだった。しかし、今おきなわ女性財団の理事長に就任した私は沖縄県から委託されている「国際家事福祉相談所」事業をめぐり難渋している。平田正代さんは沖縄女性財団の相談員として働いておられた時からこの基地の島で理念や制度の異なる谷間で悩む女性のための専門相談窓口が必要と力説されていたのだ。玉城デニー知事になりやっと窓口はできたが、まだ課題は山積している。

女性問題や福祉行政に携わっていた私は、平田正代さんがお元気な間に無国籍児問題だけでなく、基地が抱えている女性問題について十分な話し合いをしていなかったことが悔やまれる。平田さんの追悼集に当たり、今後、平田さんの意志を継ぐ女性たちにバトンが渡されることを祈念します。

追憶の平田正代姉さん

移民史研究者　大城　道子

＊子ども時代

平田正代さんの実家の平田家と我が家はすーじぐぁー（横道）を挟んで二軒西隣の「お隣さん」だった。

30代で夫を失っていた私の母は病弱で、ご近所付き合いはお向かいのまちや（商店）のKさんとTさん、隣家で同郷のＳさんぐらいだったから、もっぱら平田家とは子ども同士の付き合いだった。

この辺りには、屋良朝苗さん、平良良松さん、仲宗根政善先生、城間朝教先生、比嘉俊成先生、当間重剛さん、竹内和三郎さん、比嘉信光さん、与儀達敏さん、瀬長浩さん、平田家の東隣には大宜見朝計さんなど、戦後沖縄の政治経済教育界のリーダーの方々が住まわれていた[1]。戦後リーダーたちがこの地に家を構えたのは、米軍占領と関わっていたと私が知ったのは成人してからである。米軍占領下で那覇はながらくオフリミッツで那覇の人は収容所から戦前の元の居住地へは戻れなかった。合併前のあの頃の真和志村はオフリミッツの対象から外れていた[2]。戦後沖縄のリーダーたちは、県都那覇に近い真和志村に居住するようになった。平田家も表道路に面した角地の二百坪余を占め、塀から除く瓦屋根が目立っていた。

平田家はまさよねえさんを筆頭に、あっこねえさん、由美ちゃん、ときちゃんと女の子が続き、五番目に待望の男の子が誕生した。由美ちゃんとは小・中学校と同学年で、高校は別々の学校に進んだ。中学校まではお互いの家を行ったり来たりして遊んだ。大人になり長い空白期間の後、私家族の那覇（後に浦添へ）移転で小中学校時代の友情は復活、コロナ禍前までは数ヶ月に一度は会食をするいわゆる竹馬の友の一人だった。

５歳違いのまさよねえさんと遊ぶことはなかったが、平田家に行くと「あら、みちこちゃん」と声をかけてくれた。平田のおばさんとそっくりのやさしい声質だった。経済界で活躍しておられた父上の忠義氏は、私たち子どもには十分に大人の男性であった。「こんちは」「いらっしゃい」と応じて下さりかすかに微笑まれた。そのころのオトナの男性にみられた子どもを面白おかしくからかうなどの扱いをせず、きちんと対応して下さった。早くに父を亡くしていた私には、お父さんってこういうどっしりしたものなのだろうかとまぶしくうつった。平田のおばさん。とてもとてもやさしい方だった。遊びに来る子どもたちをいつも笑顔で迎えて下さった。忠義氏のご母堂が同居なさり、おばあさんは、いつも裏座の火鉢を前に、専用の薄い座布団に座しておられた、表に立つと、半分開いた裏座のしきりの板戸からおばあさんのお顔が少しのぞいていた。下の奥歯と前歯の間の歯がいくつか欠損し、お話をなさるたびにその部分がくぼみ、かわいらしかった。おばあさんのお声は思い出せない。

私は由美ちゃんが大好きだった。その好きには、子どもながらによこしまな感情が働いていた。私は、金魚の糞のように、彼女の行くところ付いて回った。蔡温橋[3]のたもとに、忠義氏が社長を務める沖縄貿易株式会社、通称沖貿という大きな店があった。多分沖縄島で戦後初めての貿易会社ではなかっただろうか。日本とＬＣを組んで輸入した電気製品を販売、これも沖貿が最初ではなかっただろうか。忠義氏は様々な団体の会長や責任者に付いていた経済界の著名人[4]だったから、平田

家には日常的に大勢の人の出入りがあった。また、平田家は日常生活は質素だったが、七段飾りの本物のひな人形[5]があり、お正月には振り袖を着るという、子供の目にも大金持ちだった。だから、由美ちゃんは毎月のように少女雑誌を複数買ってもらえた。私の目的は、読み終わったら由美ちゃんがポイッと投げ捨てるその雑誌だった。物欲に淡泊なお嬢様の由美ちゃんは自分が満足したらそれらの雑誌を惜しげも無く私に回してくれた。だから私はその雑誌が目当てで由美ちゃんの金魚の糞になったのだ。胸を焦がして読みふけった漫画、手塚治虫の「リボンの騎士」「火の鳥」、「鉄腕アトム」、楽しく読んだ「あんみつ姫」等々。私の読書歴は正確にはこれらの漫画から始まる。

＊まさよねえさんから正代姉さんへ

まさよねえさんの話に戻ろう。

私が中学生になり思春期になると、男の子への関心以上に、年長の同性への関心が強まった。同性というだけで将来の自分の姿を重ねてあこがれをいだいたのだろう。

大好きな由美ちゃんのお姉さんだったまさよねえさんが一人の女性の正代姉さんとして意識に上るようになったのは、正代姉さんが高校生、私が中学校在学中である。あのころ、まだ制服はなく、一般的に女生徒は紺地のセーラー服を着て、白いスカーフをふわりと胸元で結んでいた。近くのバス停留所にきちんと折り目の付いた紺色のひだスカートのセーラー服姿で、登校時の正代姉さんが、他の待ち人と少し距離をとってすくっと立っていると、私は早く高校生になりたいと憧れたものである。卯年生まれの正代姉さんと申年生まれの私は五歳違いで、憧れを抱くのに十分な年の差だった。

由美ちゃんと遊ぶために平田家へ行き、たまたま下校したばかりの高校生の正代姉さんに「いらっしゃい」と迎えられると、私は多いに照れてしまったものである。私は平田姉妹とは別の高校へ行ったので、携帯電話などない時代。その後の交流はなかった。

＊再会

正代姉さんとの再会は、私が国際福祉事務所内に一時期同居していたパールバック財団を訪問した時だった。沖縄にパールバックの名前を冠した組織があることに関心がわいたのである[6]。多分、職員募集をしており、大学卒が条件で英語の条件はなかったと思う。そこで思いがけなく正代姉さんに出会った。面接が終わって帰る時、奥の席から事務所の入り口まで送りに出た正代姉さんは仕事としては薦めないふうだったし、私も現場を見て満足した。正代姉さんは多分、私には務まらないと見抜いていたのかもしれない。

＊新沖縄女性史を媒介に深まった関係

大人になってから正代姉さんと本格的なお付き合いが開始されたのは、1994年から始まった新沖縄県史女性史編専門部会副部会長に私が就いた一九九六年からである。県史担当職員の大城幸子さんと、旧態依然の歴史を追うのではなく、女性そのものに焦点を当て、沖縄女性が拓いてきた道を跡づけて行こうと話しあい、「性・産・家族」を視点の一つとした。その一面が、米軍関係との関わりである。占領者と非占領者の間の子として生まれた子どもたちは本土でも話題とされていたが、戦場となった沖縄で誕生したこれらの人種をまたぐ子どもたちの処遇は女性問題であり社会問

題だった。県史に戦争の「後始末」をするそのような現場を書き残したかったのだ。出産にまつわる前後のことは、女性の歴史でなくて誰がしっかりと書き残すことができると言うのか。早速国際福祉相談所に勤務経験のある正代姉さんに電話をかけ執筆依頼をし快諾をいただいた。

その後私は新県史編集から離れたが、その後も折に触れて正代姉さん、大城幸子さん、今では故人となった田里トヨ子さんと談論風発の場を宜野湾の正代姉さんのおしゃれな洋間で持った。西洋風のインテリアのお部屋には、いろいろな小物が（特に生まれ年のウサギの小物）がかわいらしく飾られており、三ルームにダイニングキッチンの広い家にそのころ正代姉さんはお一人で住んでいた。

「下の子が高校を卒業すると、夫もろとも男どもを家から出したの。せいせいしたわ。」

正代姉さんには二人の男の子があった。法律的な関係を解消した後も、夫だった男性とは良い関係を継続し、仕事上必要な長文の英作はネイティブの彼にも目を通してもらったこともあったというし、母の日と誕生日には彼は、豪華な花束を贈ってくれた。留守がちだったが、その時はドアの取っ手や玄関前に短いメセージと共に花束が待っていたという。

愛され信頼されていただろう妻の座を自ら終了させた原因を正代姉さんは次のように語った。事業に関心の深かったアメリカ国籍の夫は沖縄の銀行から融資を受けられないので、代わりに妻である正代姉さん名義で融資を受けた。事業というものはうまくいくときもうまくいかないときもあるものだ。正代姉さんはその尻拭いを何度もさせられた。また外人（米人）相手の事業は、人脈をつくるのに家族ぐるみで応対しなければならず、毎週のようにホームパーティを開き、関係者を家族ごと招き付き合いを深めねばならなかった。その時は正代姉さんはドレスではなくアメリカ人が喜ぶ和服でおもてなしをした。事業も思ったようには定着せず、金銭の尻拭いだけが増えていった。若さで乗り切った和装のおもてなしも、だんだん当の自分は楽しめず、話題提供のためにパーティのたびごとに取り替える和服や帯の準備など、わずらわしいと感じるようになっていったのだ。こうして心に疲労が蓄積していった正代姉さんは、ついに結婚で背負った先の見えない重荷を自ら払うことにしたのだった。

「売春婦と妻は同じことをしている。実質的には同じではないか、とある日思ったの。それまでは売春する女性を自分らとは別者で、気の毒な、救わなければならない人という思いで接していた。」

ぎくっとするような話題をある日正代姉さんが切り出した。米兵相手に売春をする女性からの相談にのるため彼女と食堂に座っているときに天命のように、女の性は搾取されていると感じたという。目の前の疲れ切った相談者と、ケースワーカーとして優位に相談を受ける側の自分の置かれている境遇はオンナというだけで同じだと感じたという。売春婦は不特定多数の男性から生活の糧を得、主婦は特定の男性へ性を提供し生活費を得るという、性を介在としてしか女性は生きる術がなかった時代が確かにあった。そこには、我を押し殺して不幸な結婚生活を成し遂げる女性の生き方を美徳とした年長女性から引き継いだ価値観は強固だったし、夫を離れては子育ても自らの生活も立ちゆかない経済的自立からはほど遠い女性の姿があった。

こんなこともあった。途中で落ち合って一緒に正代姉さんの自宅の外人住宅に行ったときに、ちょうど隣家の初老の男主（おとこあるじ）が庭木の手入れをしていた。正代姉さんは玄関先でびっくりするような大きな声で「〇〇さん！、こんにちは。精が出ますねー」としばらく会話を交わしてから室内に戻って来た。

「男手が無いから、台風の時など彼に助けて貰うのよ。日頃から仲良くしなくちゃ。」そして「このごろ彼は耳が遠いのよ」と正代姉さんには珍しい大声の理由を付け加えた。世知を知っている彼女に自然と微笑まれた。

正代姉さんが宜野湾の上大謝名の外人住宅から上之屋のマンションに移転してからは、もっぱらハガキや手紙で近況を伝えあった。やがて、私たち家族も共働きの息子夫婦の子育てを手伝うために浦添に引っ越した。その頃の正代姉さんは、骨折を繰り返し、入院することもあった。退院してくるとハガキや手紙で「浦添まで行くから逢いましょう。おしゃべりしましょう」と書いてきた。私は孫育てに多忙だった。さらに、正代姉さんには実情を伝えてなかったが、何を隠そう、正代姉さんより年下の私にもあのころ、年齢からくる不調があちこち現われて外歩きが出来にくくなっていた。骨折し損なったこともあるし、原因不明の足指の痛みで半年間も悩んだりしていたし、何よりも正代姉さんがバスで交通事情の悪い浦添まで（まだモノレールは工事中だった）来るとき、ケガでもしたらという要らない心配をした。

何度目かの骨折で正代姉さんにはコロナ禍の入院となり妹の由美ちゃんでさえお見舞いになかなか行けないという。このころ、「世界ウチナーンチュセンター設置支援委員会」の事務局長をしていた私は共同代表の助言で広報誌の企画を立てていた。父上忠義氏の海外協会での活動を知っていた私は是非関係者として正代姉さんにも一文を書いて欲しいと手紙を出した。後で由美ちゃんから聞いたところでは、書きたい気持ちは重々だったが、まとまった文章を書くにはもう体力がなかったという。とうとう前記の広報誌には正代姉さんの文章は掲載できなかった。

ある日お見舞い代わりに静岡のみかん農家の知人にみかん一ケースを姉妹に送ってもらった。由美ちゃんは、たまたま自宅に戻っていた正代姉さんへみかんを運び、美味しそうに食べる正代姉さんのことを電話で報告してくれた。正代姉さんはみかんじょーぐーだった。

コロナが少し落ち着いたらこんどこそ女性史が縁で出会った数人で再会の宴をもちたいと願っていた矢先、突然４月22日訃報は妹の由美ちゃんからもたらされた。

26日のお別れ会ではじめて息子さんお二人に会った。アメリカンスクールのPTA活動にも、元気な男の子がやらかしてしまう際の謝罪にも、正代姉さんはお一人で奮闘したという。すでに、50代前後の二人の息子さんはそれぞれ家庭を持ち立派なパパだった。正代姉さんはおばあちゃんになっていた。

私には正代姉さんに二つの不義理がある。一件は那覇の東町にあった県の語学センターで英語の講師をしていた正代姉さんは、そのころ遠方から通えない私のために、コピーした英語の問題を郵送してくれた。回答を送ると正代姉さんが添削して次の問題と共に送り返すという通信添削方式である。結局数回の通信で私は挫折してしまった。

次に俳句である。玉城一香先生の通信句会誌『荒妙』の分厚い案内を速達で送って下さったのだ。大いに私はやる気になったが、どうしても十句つくれず、これは一度も出せずに挫折した。折角正代姉さんが那覇からは遠方に住み、英語講座や句会に通えない私に配慮して下さったのに、応えることが出来なかった。そのことで正代姉さんが非難めいた苦言を発することは一切無かった。親切に応えられず、すみません、正代姉さん。

人前でハンカチでやおら音をたてて洟をかんだときはびっくりした。「自然現象だから遠慮する

ことはないのよ。」という。アメリカではそのためにハンカチを持っているという。おしゃれではなく実用的な持ち物であると。正代姉さんは合理主義者であった。理にかない納得したことは即実行の人だった。外見をはばかり見栄を張るなど、無縁の人だった。また、一緒に食事をすると所作の美しさに見惚れた。特にスプーンの上でくるくるとフォークに巻き付けたパスタを、一筋も垂らさずにきれいに口に運んだ。

＊学生時代の作品

ジャーナリストの三木健さんから、東京での学生時代に正代姉さんとは同人誌の誌友であったと聞いたのは、彼女の死を話題としていた時である。早速同人誌をお借りして若き日の正代姉さんの思想を探った。質素な壮丁の雑誌「青嵐」はA５サイズの百ページに満たない小誌である。三木さん手持ちの六冊の中から正代姉さんの作品が掲載されていたのは、

第二号　「十和田湖・北海道ホステリング」　1960年12月

第三号　「春の風」　1961年６月

第四号　「マンスフィールド概観―各年代の作品にそって―」　1961年10月

の三作品があった。一番長いのが「十和田湖」で８ページに亘った。北海道への憧れは雄大な自然の景観とアイヌに代表されると書く。アイヌについては、老人や若い青年が木彫りをしている場面に出会い彼女は次のように書く。

> 自分の民族を売りものにする哀しさに彼等は気がつかないのか。あるいは悟り、あきらめてしまったのだろうか。感じの良い初老のアイヌだけに、滅びゆく民族の姿を彼の肩に感じた。

彫り物をしている「すばらしくきれいなアイヌの青年」に関してはこうである。

> もうこの青年には自分の民族の何たるかを考える暇はないに違いない。内地人への一種の見せ物としてショーウインドで熊をほり人におもねて暮らすより他に道はないのかも知れない。こうして誇りを失った民族というのは滅びてしまう。

シャモに搾取されたアイヌの歴史、彼等が木彫りをしなければ生きていけなくなった歴史的背景をこのころの正代姉さんは無知だったようだ。（もちろん、私もそうだったが）

この北海道旅行では、財政破綻前で石炭産業隆盛時の夕張炭鉱にも行き、「これだけの人々の生活をみるので会社も大変なことだろう」「組合の力は強くても割合うまくいっている由、労使が石炭という生活の基盤を媒介としてしっかりむすびついているからだと思った。」と客観的にまとめている。また、旅の途上で出会った防衛大学新聞部の学生と交わした会話では

> 時ならぬ安保論争を網走湖上ではじめた。同じ世代の立場を異にするものとして―平和を願うという根本に変わりはないが―特に、理想と現実についての考え方は面白かったし、勉強に

もなった。

と、正代姉さんらしく柔軟に冷静にまとめている。正代姉さんが早稲田大学で学んでいた時期は、日本は安保条約改定[7]の嵐の中にあった。東京大学の学生であった樺道子さんが圧死した国会前の全学連[8]デモに、正代姉さんも、しかも樺さんの近くで早稲田のデモ隊の隊列の中にいた、あの頃、多くの学生が社会の在り方を真剣に考え行動したように、正代姉さんもそういう一人だった。そのときの話題になると正代姉さんの頬は赤みを帯び、瞳がきらきらし始めたことを私は覚えている。

第三号掲載の「春の嵐」は正代姉さんには珍しいと思われた恋愛＝失恋物語で掌編小説[9]である。「卒論ゼミの発表と演奏会の下合わせでとても忙し、今度は棄権しようかと思いましたが、ほんの軽いもののつもりで書きました。お刺身のつま程度にお読み下さい。」と。率直だった正代姉さんに、謙遜は似合わない。正代姉さんが楽器を演奏していたことをこの後書きで知った。妹の由美ちゃんによると早稲田の箏曲クラブで生田流のお琴を習っていたという。

早稲田大学英文科に籍を置いていた彼女の専門的な才能が感じられた評論が英国の作家キャサリン・マンスフィールドについての概観である。ニュージーランド出身のマンスフィールドは「自分の捨てた故郷ニュージーランドに激しい憤りを感じていた。刺激の無い、ぬるま湯的な上流生活は」彼女にとって耐えられないものであっただろうとして、しかし、ロンドンでの生活ではやはりエトランゼ（仏語、異邦人）でしかない孤独感にさいなまれた。最後には、弟の戦死によって彼女の故郷観＝人生観は変わる。

> それまで彼女の持っていたものが、すべて無駄なものであったことを空しく悟った時、そこに残されたのは愛であった。愛以外に頼りになるものはない。愛がすべてなのだ。

と正代姉さんは読み解き「あらゆるものは変化する。それ故苦しみもいつかは愛に変らねばならない。」と引用しつつ（多分戦死した弟との思い出の詰っていただろう、そして彼女が憎んでいた）ニュージーランドの想い出に心の拠り所を見いだしたマンスフィールドが、円熟期に入る作品「プレリュード」を書き始めたのだと。

「記憶の純粋化は、彼女を自己滅却へと導き「私の哲学は、個性を破壊することである」」として、人物の内面に入り込む手法を確立させていく。正代姉さんは「それこそ彼女がなしとげた最大の功績」と評価する。

私には、マンスフィールドの故郷出奔と故郷愛への回帰は、あのころ大和で学び青春を過ごした沖縄青年の心情や行動のそれに似ていると思われる。英文学を専攻した正代姉さんの確かな専門性を感じさせる「マンスフィールド概観―各年代の作品にそって―」論である。さらにブラッシュアップされたマンスフィールド論は卒業論文に完成したという。

エスプリを効かせ客観的に語る正代姉さんの茶目っ気も偲ばせた社会時評の数々を思い出す。一

方、ライブを聞きに東京に通うほど、ジュリー（沢田研二）が好きだった。いつもにこにこしていたなあ。染めたことのないたっぷりした美しい白髪は、どこからでもそれと分かったトレードマークだった。週一回妹の由美ちゃんと従妹さんの経営する美容院に行くのが楽しみだという。従妹さんを応援するための週一の美容院通いであっただろう。

那覇で駐車場に悩まされ、早々と運転免許証を返納した私もまた過ぎゆくバスの中から、上之屋のバス停留所に立つ正代姉さんを眺めたのが、現し身の正代姉さんをみた最後だった。新型コロナが沖縄で流行する少し前のころだった。（2022年12月18日了）

注

[1] 当時、屋良朝苗は教職員会会長、平良良松は政治家、仲宗根政善と城間朝教は琉球大学教授、比嘉俊成は中学校校長、当間重剛は政治家、竹内和三郎は沖縄製粉会社社長、比嘉信光は教育行政、諮詢会委員だった大宜見朝計は医師、与儀達敏と瀬長浩は副主席など。

[2] 王府時代の商都那覇は、1872年の廃藩置県で那覇に役所が置かれ1896年の那覇区を経て、1921年那覇市となった。沖縄の地上戦後は全面立入り禁止区域に指定されたが壺屋だけは復興の先駆けとして陶器職人とその家族の入域を許可。1949年シーツ長官は那覇を沖縄の首都に設定。市街地も徐々に開放されていった。1954年首里市と小禄村を、57年には真和志村を合併し現在の那覇市域が定まった。

[3] 現在の那覇市牧志駅東側の国際通り安里のさいおんスクエアの安里川にかかっている橋。

[4] 平田忠義は伊是名で誕生。沖縄師範学校を中退し、19歳でペルー、メキシコで働く。帰国後は東京の駐日コロンビア共和国公使館に勤務。その後、ジェトロの前身貿易組合中央会に勤務。大東亜博覧会日本事務局の次長として６か月をサイゴン市に赴任。1947年12月46歳、密航で沖縄帰還、両親の無事を確認。米軍スタッフエンジニア泡瀬構作隊副隊長として入隊。その後は貿易会社など経済界で活躍。60代後半から80代には、沖縄ペルー協会、沖縄海外協会などの顧問や会長に就任。1976年10月から１か月に亘り、県赤嶺総務部長と共に南米四か国を視察。1986年11月85歳、海外移住貢献で外務大臣より表彰を受ける。「平田忠義回想録」（1988年）、『赤ん坊たちの（記憶）』（2012年）。95歳で天寿を全うされた。

[5] 小学校の同窓生は「学級で先生に引率されて平田家に本物のひな壇を見学に行った。」と話している。

[6] パールバック財団は『沖縄大百科事典』（186ページ）の金城清子執筆によれば沖縄では1967年９月創立とある。それ以外の資料を沖縄で確認できていない。一人娘が知的障害だったバックはノーベル賞で得た賞金を元手に社会事業に乗り出した。国際孤児支援団体である「パール・バック財団」のアメリカでの設立は1964年である。「1965年までの間に韓国、台湾、返還前の沖縄、フィリピン、タイ、ベトナムに支部を開設」と佐川陽子は（「社会運動家パール・バックとＧＨＱ占領下から日中国交回復期の日本人―バックが起こした社会運動を事例に―」（「二十一世紀社会デザイン研究」、2020年）とある。パールは『私の見た日本人』（原本一九六六年、翻訳は国書刊行会より2013年）の最終ページに、沖縄人の米国政府への敵意に「沖縄の女性とアメリカ兵との間に生まれた数多くの子供たちの存在」が、現在の不満と将来に対する不安を増幅していると指摘している。正代姉さんがケースワーカーから所長を務めた国際福祉相談所とパールバック財団沖縄支部との関係は不明である。『なは・女のあしあと』（277ページ）は国際福祉相談所の開設を1958年としており、パールバック財団の沖縄との関わりはさらに研究が必要である。

[7] 1951年９月８日、日本はサンフランシスコにおいて平和条約に調印、独立を回復。さらに同日、米国との間で「日本国とアメリカ合衆国との間の安全保障条約」（旧安保条約）に署名し、米国との同盟関係を確立。1960年１月、日本の改訂提議で国会承認では反対する学生や労働者を中心に激しい闘争が続いた。六月には両国は、「日本国とアメリカ合衆国との間の相互協力及び安全保障条約」（現安保条約）に署名した。

[8] 全日本学生自治会総連合の略称。

[9] 掌編小説とは短編よりももっと短い小説のこと。

若　尾　典　子

初めて正代さんにお会いしたのは、1982年、国際福祉相談所を訪問したときである。沖縄の無国籍児問題の実情を知りたいと電話をすると、正代さんは即答した。「研究ということで了解です。ただし、自分で調べること」と。無国籍児問題は、広大な米軍基地を抱えるがゆえに、沖縄に集中的に起きた「子どもの人権」問題である。と同時に、結婚届にひそむ「性差別」問題である。当時の日本の国籍法は「父系優先主義」であり、結婚届を出した日本国籍女性に、子どもへの国籍継承権はない。私が子どもの国籍問題に直面しなかったのは、結婚相手が日本国籍男性だったことによる。在沖米軍基地に関係する外国籍男性との結婚に、より切実な思いを結婚届に託したであろう沖縄の女性たちに、国籍法の父系優先主義の壁が立ちはだかる。何の疑問もなく結婚届を出して暮らす自分が問われる思いで、私は相談所を訪れた。正代さんは「この机を使ってください」といい「資料は後ろの棚。守秘義務があります」と注意し、自分の仕事に戻る。以後、大学非常勤の仕事の合間をぬって、首里のアパートからバスで通う日々が始まった。

正代さんから多くのことを学んだ。とくに「自分で調べる」との注文の意味が、ケース記録を読むという初めての作業のなかで、私にもわかってきた。ケース記録には、無国籍という法律問題に直面する家族、とりわけ母親の生きる多様な現実が書き留められている。この多様な生活世界の一つひとつに寄り添うことがソーシャル・ワークであり、この点は法律家も同じなのである。正代さんは「法律家は、法的問題ごとに整理してケース資料を出してください、なんていうのよ。そんなことができるなら、とっくに問題は解決しているのにね」と笑う。当事者の生きる現実を、法律家もまた自分の目で読み解くことが必要なのだ。ケース記録を読むなかで私も、法改正をまつことなく無国籍児が国籍取得できるケースを発見する経験をした。人権問題に取り組む姿勢を、正代さんから学んだ。

正代さんたちのケース記録、その問題整理の蓄積は、1985年に国籍法が「父系優先主義」から「父母両系主義」へと改正される原動力の一つとなった。国籍法改正のために国会で証言した瀧岡直美さんを中心に、正代さんたちが熱心に議論を重ねていた姿も思い出される。沖縄の母親たちの経験は「子どもに自分の国籍を継承する権利」を日本の女性すべてに獲得させた。と同時に、無戸籍問題などは、すでにケース記録において明らかにされており、沖縄の母親の経験を受け止め生かすことは、その後も日本の法律に求められ続ける。正代さん、ほんとうに、ありがとうございました。

平田正代さん追悼

弁護士・沖縄大学名誉教授　組原　　洋

平田正代さんはもともと私の妻・組原洋子の友達で、私の娘がまだ小さかった時分に、牧港のお宅に家族そろって何回か訪ねていったことがあった。そういった関係もあって、1983年６月29日に開催された沖縄大学法学会総会の講演では、彼女に「沖縄における国際福祉の現状－無国籍児問題を中心にして」という題で話してもらったが、当時は「国際福祉事務所・ケースワーカー　ケリー正代」という肩書き・氏名になっていた（沖縄大学法学会誌第３号、1984年所収）。

妻が那覇市中央公民館で働いていたときに平和学習講座を担当していて、1991年の第２回平和学習講座の第４回目は、S･マーフィ重松氏の「沖縄のハーフとアイデンティティ」で、コーディネーターが平田さんだった。私もこの講演を拝聴し、テープ起こしをしたもののワープロ原稿も作成した。マーフィ重松氏は2002年に『アメラジアンの子供たち』（集英社新書）を出版している。非常に興味深い内容で、私は長らく講義で利用した。

その後も平田さんには、沖縄大学で1996年度以降設置した自治体学入門の外部講師として毎年１回お願いしたりしていた。

私は2014年に沖縄大学を定年退職してからは、平田さんと定期的にお会いすることもなくなったが、2017年に弁護士として、日本人がフィリピン生まれの無国籍児と養子縁組をする件を引き受けた際に、その手続について平田さんに尋ねた。その時連絡を取ったら、平田さんは大浜第一病院に入院しておられて、10月21日お見舞いもかねて病院に行ってお話を伺った。足を骨折して前日手術し、これからリハビリが必要とのことだったが、頭はしっかりしていて、実務的なアドバイスがもらえた。

その後しばらくして、たまたま県庁前のバス停で平田さんとばったり会って、立ち話したが、結局それが最後になった。

ご冥福をお祈りします。

平田正代さん、追悼メッセージ

ジャーナリスト　山城　紀子

日本の社会に「無国籍児」がいる、という問題が明るみに出たのは1970年代の後半でした。多くが沖縄にいるということもわかりました。国会で社会党の土井たか子さんが国籍における女性差別について質問したことがきっかけになって問題が表面化したのです。1977年３月のことでした。

1977年といえば、世界的規模で男女の平等や女性の地位向上に取り組む活動が始まって、日本社会でも強い関心が向けられていた頃です。

日本の国籍法が父系優先血統主義を採っていて、父親が日本人なら子も日本の国籍法を取得でき

たのですが、母親は我が子に国籍を与えられない法律になっていたのです。子を産むのは女であるにもかかわらず、自分の産んだ子どもに国籍を与えられない。なんという性差別的な法律がまかり通ってきたのだろう、と衝撃を受けたことを記憶しています。

沖縄に無国籍児が多かったのは、日本全体の0.6％の面積しかない沖縄県に70％余の在日米軍専用施設、つまり基地が集中していたことが背景にありました。沖縄の女性と米兵との恋愛も生じれば、結婚もあるわけです。アメリカは国籍の取得に出生地主義を採用していますので、米国に10年間の居住経験があることなどの条件を満たしていない場合は国籍を得られません。

従って沖縄の女性とアメリカの男性が結婚すると、二つの国の国籍法のはざまで生まれた子どもが無国籍児になるわけです。

国際問題のケースワーカーとして沖縄国際福祉相談所に勤務していた平田さんらは問題が明らかになるずっと前からこの深刻な母子の実態に取り組んでいたものの、動こうとしない日本政府やアメリカ政府になすすべがなかったそうです。「アメリカ側にかけあっても日本側にかけあっても、自分たちとは関係ない、と。法務局も何もできない、と言われ続けた」と平田さんは語っていました。1979年の国際児童年に、無国籍児の相談が60件あるということなどを発表してやっと問題が動き始めたいきさつがあります。

国際福祉ケースワーカーを志した原点は「60年安保」と語った平田さんにとって、沖縄の女性と米兵との恋愛や結婚によって生じるさまざまな問題―異なる法律や文化などを背景に―に「私がやらねば」という強い使命感を持ったであろうことは容易に想像できます。

しかし、立ちはだかる壁にどれだけ憤り、苦悩し、歯がゆい思いをしたことでしょう。1985年に国籍法は改正しましたが、基地は相変わらず沖縄に集中し、基地があることによって多くの事件事故が生じるという現実は何も変わっていません。米国人との結婚、離婚、養育費の問題なども現在進行形の問題です。

平田さんの資料集が後輩の女性たちによって作られようとしています。平田さんの仕事を記録し、記憶することこそ、追悼になるのだと思います。

平田まさよさんと俳句

沖縄俳句研究会　神谷　石峰

まさよさんが俳句を始めようと決心したのが1989年、50歳の年である。彼女はどうして50歳になって俳句をはじめたのだろうか。合同句集第十集（66歳）の文章に「追われ続けの人生であった・・・挫折も悲しみもよろこびもあった。その時々の気持ちを17文字に込めて記録した」とある。これを見ると、自分の生涯の歩みを仕事以外にも何かの形で残して置きたかったという気持ちを感じる。その一つが彼女にとっての俳句であったのだろう。

抗議聞く夾竹桃は基地の中　　平田まさよ

俳句を作りはじめた頃の作品である。無国籍児問題に頑張っていたまさよさんにとって基地は避

けて通れない。毒を持ったピンク色の美しい花は、基地の中にあって私たちに敵対しているのだと。

ポインセチア飾りて閉じる修羅の門　　平田まさよ

ご主人と離婚された頃の作品。楽しいはずのクリスマスのポインセチアが作者の離婚の決心を示すものとなっている。掲句以外にも、その頃の俳句に「触れられぬ乳房に軽き夏ぶとん」、「夏枯れや愛を下さい点滴で」、「愛憎を点滅させてクリスマス」など複雑な気持ちを詠んだ俳句が並んでいる。

さらさらといのち涸れゆく月の夜　　平田まさよ

母親が亡くなられた時の作品である。母親の死を「さらさら」と言う軽い言葉で表現することで悲しみを深く滲ませている。生前、長いこと施設に入居していた母親が天国で明るく暮らせることを祈っているような句である。以上三句は、沖縄俳句研究会編の『沖縄俳句歳時記』に掲載されている作品である。

俳句以外にもう一つ彼女を支えていたものに、ビールがあったのでは。俳句人生の十数年間ビールの句を詠み続けている。

息子あり無言のビールニッと出る　　平田まさよ

生きてます女とビール相性よく　　平田まさよ

父偲ぶ銀座の秋のビヤホール　　平田まさよ

新ビール試飲の列に喉並ぶ　　平田まさよ

また、俳句の師である玉城一香氏に「**四捨五入ばかりの四十路ビール抜く**」という句の色紙を貰い、大切に飾っていたらしい。

星の国でもビールを飲みながら楽しんで下さい。（合掌）

平田先生の思い出

池宮　康子

ご無沙汰しているうちに、もうお会いできなくなったことを知り、実感のないまま、あの素敵な笑顔を思い出しています。

平田先生との出会いは20年以上前、語学学校での教師と生徒としてでした。何年か教えを受けた後、米軍資料の翻訳の仕事を紹介していただき、先生を中心に４人ほどでチームを組み、作業に取り組みました。先生は、きれいな日本語、わかりやすい日本語にこだわり、何度も集まっては、文章のブラッシュアップに励みました。お仕事を紹介してくれただけではなく、丁寧に指導をしていただいたことをとても感謝しています。この作業がきっかけとなり、食事をしたり、ドライブしたり、親しく会話を楽しむようになりました。

もともとフランクな方でしたが、年下の私には話しやすかったのか、いろいろな思い出話を聞かせてくれました。東京の大学で学生運動に出会い、沖縄の置かれている現状に気づかされたこと。熱烈なアプローチを受けて結婚、その後離婚したこと。自立の道を探し、試験に挑戦したこと。何

より興味深かったのは福祉活動のエピソードでした。特に沖縄の女性と米軍人の間に生まれた子を米人家族に世話をする養子縁組のエピソードからは、古きよきアメリカというものが感じられて、とても心打たれました。

先生の言葉の中で、特に印象に残っているのは、「南の島のバカンスなんて考えられない。一日何もしないで、浜辺に寝転がっているなんて。そんな時間があったら私は勉強したい」です。ジュリーの大ファンで、具志堅用高がヒーロー。卯年生まれでうさぎグッズを集めていることなどなど。真面目で知的で、そしてとてもチャーミングな方でした。

ある時、お世話になった先生に何か恩返しをしたいと思い、先生の福祉活動をまとめて本にしたらどうだろうかと思いつきました。雑誌や新聞などの記事のコピーを集めて、私のプランを申し出てみたのですが、先生は、「表にでるのは他の方に任せているのよ。私は裏方でいいの」とやんわり断られました。

福祉活動とは縁なく過ごしてきた私ですが、今、未熟ながら要約筆記者として活動しています。思えばこの仕事について教えてくださったのも先生でした。
ご冥福をお祈りいたします。

……

哲楽家　紀々

平田正代さんは、どんな方？

そう問われたら「強くてやさしい人」。印象的なのは、笑顔の柔らかさとズバリな本音の意外なバランスです。

「ワセジョ（早稲田大学出身の女性）」として私の憧れの存在でした。早稲田大学への進学を決めたきっかけの一つも「正代さんの選んだ大学だから」です。

振り返ってみると、正代さんとは私が小学生の時から家族ぐるみでの交流がありました。

そんなにじっくりお話したことはないのですが、人生の転機に風穴をあけるカギを頂いてきました。特に思い出深いカギを二つご紹介します。

ひとつは、10代のころ語学留学をするか進路に悩んでいた時に頂いたアドバイス。「まずは母国語が大事よ」とのお話から「何語を話すかよりも、何を語るかを大切にしよう」と思ったのでした。

もうひとつは、たぶん20代前半。まだセクハラという言葉も浸透していない時代に、私は男性の多い現場で悩む日々を送っていました。

女性の講師であることや若さを強調されることなどに違和感を抱え、髪を短く切って黒のスーツを着て武装していた時代に支えになったのは、正代さんの生き方でした。

「女性だから男性だからではなく、一人の人間として胸を張って生きていい」。

正代さんに頂いたカギを、今度は私から同じ生きづらさを抱える人へ届けていきたいと思います。まだまだ自信のもてない私に、正代さんなら「大丈夫よ」とにっこり言って下さる気がします。

正代さんの「大丈夫」には、不思議な安心感がありました。その一言で、「きっと大丈夫」と思

えるのです。転機を応援する仕事を選んだ一人として、そんな「大丈夫」はいつも憧れでした。

もしこれからの時代の生き方を正代さんに尋ねたら？

「自分のチカラで生きることを考えなくちゃね」、そんな答えが浮かびました。最後までみんなに迷惑をかけないという選択は「自分の人生を自分で生きたい」という哲学でもあった気がするのです。

「強くてやさしいワセジョ」な先輩の背中を、これからも追いかけ続けます。

あした、転機になぁれ！

平田正代さん追悼文

城田　由美子

2022年４月25日　平田さんの訃報と明日「お別れ会」があるとの連絡が入りました。あまりにも突然すぎる訃報に目がくらみました。

昨年11月初旬、私は、県の職員と共に平田さんにお会いし、国際福祉相談所と国際福祉相談の現状をお聞きしました。

その時の平田さんは足を痛めておられ、心なしか加齢を感じたのですが、無国籍児の取り組みや国際福祉相談所時代の話になると目がキラキラと輝き、時代を担う若者への期待感を熱く語ってくださいました。そして、再会を約束し、お別れしたのが最後となりました。

平田さんとの出会いは、てぃるる相談室に「国際相談員」として着任された平成10年からです。てぃるるでの勤務以前、児童養護施設で勤めていた私にとって平田さんは、国籍法の改正や無国籍児問題に取り組まれた「歴史上の人物」なのです。夢のような出会いに、緊張と期待感が膨れ上がったことを今も鮮明に覚えています。しかし、そんな緊張も仕事の中で平田さんはすぐに解きほぐしてくれました。

会話は、洗練されたユーモアがあり、メディアで「アメ女」という差別語が流布されると「あら、私だってアメ女よ」と満面の笑みで切り返したのです。

「そばはそばでも、あなたのそばが好き」とお茶目に笑ったり、時にはアメリカ映画さながら、口紅をサッとひと塗し、美しくセットされたパーマネントの頭髪にビニールの頬かぶり？を着け、大事な大好きな息子からのプレゼントの傘をバッと開き、颯爽と裁判所に出かける姿には「かっこいい！」と何度叫んだことでしょう。

平田さんとの最高の思い出は、てぃるるのプロパー職員の具志堅邦子さんと３人で大阪での第５回全国大会プレイベント、フェミニストカウンセリング結成５周年記念講演会の「セクシュアリティとフェミニズム」レオノア・ティファーさんの講演会に参加した時のことです。

女性活動家として、心理学者、そしてセクソロジストのレオノアさんは、フェミニズムにより、「目を開かされた！」そして「口も開かされた(スピークアウト)！」と述懐したのです。私は、レオノアさんと平田さんが重なり、震える感動と共に私の人生の扉が開かれた感触を味わったのです。

「家族のプライベートな面を公表するようで大変恥ずかしいのですが、父、平田忠義の生き方に関心を持っていただければ、とても嬉しいです。」と『平田忠義回想録』をいただきました。著書には、「父のムスコ正代」と記されていることに驚かされました。

平田さんが語ってくださった「３本仕事を持つこと」「ケースが動けばいいのよ」「私、俳句をはじめたのよ」などの言葉を忘れられません。

平田さん、私は貴方の生き方にも大変な関心を持っています。沢山の笑いと学び、感動・勇気をありがとうございます。

……

棚原　美菜子

コロナが流行る少し前、当時、私の勤める職場へ、平田さんがひょっこり訪れたことがありました。「道に迷ったのよ。あたな、今、こちらにいたのね」と話され、再会を喜びあいました。

私は、沖縄県女性総合センター（当時）てぃるるで一平田さんと一緒に仕事をすることができました。再会の時、てぃるる時代の出来事などをおしゃべりして、平田さんは「あの頃は楽しかったわね」と笑っていました。私をはじめ、当時のてぃるるの嘱託職員は血気盛んであちこちとぶつかりながら突っ走っていて、平田さんは未熟な私たちを支えてくれて、いつも面倒ばかりかけていた記憶があったので、「平田さんもあの頃を楽しかったと思ってくれて嬉しい」と言うと、「私たちの青春ね」と返してくれたお茶目な笑顔が忘れられません。女性支援の仕事が初めての私は、何度も相談室に駆け込んで、平田さんを中心としたてぃるる相談室のみんなに知恵をもらい、慰められ、励まされて働いていました。仲間と一緒にたくさん働いて、たくさん怒って、たくさん泣いて、たくさん学んだあの頃は、苦しいことも悔しいこともたくさんあったけど、確かに『私たちの青春』で、濃密な時間を一緒に過ごせたことが宝物になっています。

振り返れば、私が平田さんと一緒に働いたのは短い期間でした。でも、長く一緒にいた感覚があるのは、あの濃密な時間が、私の働く基盤となっていたからで、その後、どんな仕事をしていても、平田さんと一緒に働いていたのだなと思います。

平田さんの訃報が届く少し前、私はやっと正規職としての職に就くことができました。しかし、目の前のことに追われ、平田さんがどんなに喜んでくれるか知っていながら、「コロナが落ち着いたら」を言い訳にその報告をできないままにしてしまいました。先述の再会の時、非常勤で働く私に平田さんは「ごめんね。私に力がないばっかりに」と言うので慌てたことを思い出します。有期雇用のてぃるるを退職した後、嘱託職員のみんなが非常勤の職を転々としていることを平田さんはいつも気にしていて、心遣いや励ましをいただきました。それなのに、就職の報告をしなかったことが心残りです。

今回、仲間とともに平田さんの残したものを整理し、その足跡を辿りながら話をしていると、傍らに平田さんがいて、相変わらず悩んだり怒ったりしている私たちを笑顔で見ているような感覚になりました。きっとこれからも事あるごとに平田さんを感じて働き続けるのだなと確信しています。

心強くもあり、また後に続くものとして平田さんに恥ずかしくない働きをしなければと身が引き締まります。平田さんからいただいたものを胸に、これからを精一杯努めようと思います。

……

平田正代さんへ♪

ジェンダー勉強会メンバー　仲村　宮子

平田さん、お元気ですか？

お別れしてから、８か月が過ぎてしまいました。

平田さんの「資料集」の作成メンバーに私も加えていただいているのですよ。とお伝えすると、平田さんはきっと、「はっさ！　あんたもナンギしているのねぇ～！」と、ニコニコと言ってくださると思います。

平田さんの「はっさ！」という言葉がうれしく耳に残っています。

そうそう、ユーモアのセンスが抜群で、ウィットに富んだ会話は、常に刺激的でした。

雨の日に国際通りでバッタリお会いした時の、レインコートーとレインヘッドスカーフでバッチリきまっている平田さんに「おしゃれですねぇ～、レインウェアーがよくお似合いです。『奥さまは魔女』のサマンサみたい！」の会話を思い出しました。

それに、「フィラデルフィア空港」から沖縄出身の女性を移送してきた業務は、平田さんでないとできなかった仕事だと思います。

心が強くて物事を恐れない、「肝っ玉が太く／据わっている」平田さんだからこそできたのだと思います。

平田さんの書かれた多くの文章を読んでいると、「強くて優しく、自分に厳しい」方で、他人を思いやる気持ちが大きい人だったのだと確信することができました。

平田さんの業績を少しでも多くの方に知ってほしいとの思いで、作業を進めてきました。しかし、その作業の一つひとつは、私のためだったのです。平田さんの生き方に学ぶ時間となりました。まずは、自分の中の「勉強を継続する力」を育てていきたいと思っています。

平田正代さんから学んだこと

沖縄大学　成定　洋子

私は、2002年４月、沖縄県女性総合センター「てぃるる」の講座企画運営に携わる嘱託職員として入職した際、当時「てぃるる」の国際相談員をされていた平田正代さんと初めてお会いしました。それから、二十年間、公私に渡って、平田さんに大変お世話になり、平田さんから様々なことを学んできました。

平田さんは、仕事から日常的な会話に至るまで、常に弱い者の側に立つという姿勢を貫いておられました。しかし、それは、決して、弱者をかわいそうで何もできない被害者としてのみ見るものではありませんでした。平田さんは、弱者を、それぞれの意思を持って行動する、責任ある主体としても考えなければならないと話されていました。今振り返ると、このような平田さんの立場は、女性を保護や更生の対象とする売春防止法的な見方から、支援されるべき主体へと位置付け直そうとする、2024年４月施行予定の女性支援新法を遥かに先取りするものであったように思います。弱者を上から見下ろすのではなく、弱者と同じ目線で、弱者がどのように「弱者」とされてきたのか、どのような意思を持っているのか、なぜなのかということを丁寧に考えることの重要性を教えて下さいました。

また、平田さんは、いわゆる中産階級的なフェミニズムと立場を異にされていることを明確に示されていました。ご自身も非正規雇用者であり続けた平田さんは、ジェンダー問題における労働問題をとても重要なものとして考えておられました。「てぃるる」などの女性センターや自治体などにおける低賃金で不安定な非正規雇用問題こそ、深刻で重大なジェンダー問題であると懸念されるとともに、中産階級的なフェミニズムが見落としがちであることを危惧されていました。

さらに、女性や女性の生き方は、一枚岩ではなく、いかに多様であるかということを忘れてはならないと仰っていました。ご自身の経験と異なる女性の生き方も否定的に見ることのない平田さんの自由な視座は、経験主義や本質主義から解き放たれた、既成概念に囚われないものであり、私の個人的な生き方についても、いつもそのままでいいと力強く優しく後押しして下さいました。

平田さんは、私にとって、生き方や仕事、社会運動やその他のあらゆることがどうあるべきかについていつも真摯に示して下さる、人生の羅針盤であり、かけがえのない尊敬する師であるとともに、抜群のユーモアセンスと温かい心で癒して下さるオアシスのような唯一無二の存在でした。平田さんは、私が交通事故の後遺症で「てぃるる」を雇い止めされそうになったとき、ご自身も一年ごとの不安定な労働条件であったにもかかわらず、「私が県と直談判する」と言って下さいました。平田さんの言葉の有難さと重さを忘れることはないでしょう。

平田さんが余りに早く亡くなられた喪失感は計り知れなく、未だに信じられない気持ちです。しかし、亡くなられてなお、この資料集づくりを通して、私たちの関係を結び直して下さったことに対して、言葉にならない感謝の思いでいっぱいです。平田さん、これまでいつも本当にありがとうございました。少しでもこれまでの重荷を解かれて、どうぞゆっくり安らかにお休みになられますよう心から願っています。

「てぃるる」相談室での平田さんのこと

宮良　綾子

私がはじめて平田さんにお会いしたのは2001年、沖縄県女性総合センター（当時）「てぃるる」の相談員を志願して臨んだ面接の場で、面接官の１人が平田さんでした。私は基地と女性の問題への関心だけで、相談業務の経験など何もありませんでしたが、平田さんは私が法学の背景を持つことに興味を示してくださいました。

当時の相談室は平田さんを含め相談員は４人。まだ20代から30代だった私達に、平田さんはよく、国際福祉相談所での仕事についての話をしてくれました。平田さんは、「てぃるる」でもいつでも相談に対応できる体制があることが大事だということを話されていて、相談室では平田さんを中心に他の相談員も国際相談に対応するようになっていました。相談員にとっては、平田さんと他機関とのケースのやり取りや、米側の書面を間近に見させてもらい、じかに触れることで、国際相談というもののイメージを共有することができたことは大きかったのですが、その頃は何よりも平田さんから直に学んでいるということがバックボーンとなり、未熟な私達を後押ししてくれていたように思います。

私が平田さんから言われていたことは、「自分の人生に責任をもちなさい」ということでした。私は、それは単に経済的な自立というだけではなく、自分の生き方を定めてその主体となること、だったのではないだろうかと理解していますが、平田さんご自身の仕事に向き合う姿勢からも感じられたことでした。当時、平田さんは、「てぃるる」での相談業務の他に法廷通訳や翻訳の仕事などを兼務し、常に忙しくされていましたが、「何本もの（仕事の）脚を持つことが大事」であることや、「自分は英語というもう一つの軸があるからこの仕事を続けてこられた」ということを話してくださったことがありました。その頃の私は自分の進むべき方向性を決めかねていましたが、平田さんから法学に軸足を置いてやっていくほうがよいのではないかということを言っていただき、その縁でその後、「てぃるる」での相談の経験を活かせる仕事へ繋がり、もう一本の脚を持つことができました。

その頃の相談室には、雇用の問題や事業の企画と、平田さんのことを頼ってやって来る職員も多く、平田さんの周りはケースの相談だけでなく、幅広い話題でいつも熱気を帯びていました。皆の話を聞く平田さんの嬉しそうな顔が懐かしく想い出されます。

「てぃるる」の相談室で平田さんは国際相談を守り続け、多くの女性や子どもの問題を解決へと導きました。そして、御自身の経験を通した言葉で私達のことを力づけ、背中を押してくださいました。平田さんには、感謝の言葉しかありません。平田さん、長い間お疲れ様でした、お世話になりました。

平田さんへ

嘉手納　美音

「コロナが落ち着いたらお会いしましょう」が平田さんとの最期の会話になってしまいました。今でも興味深いニュースや出来事があると、「平田さんに知らせなきゃ」と思い、それももう叶わないのだとハッと我に返り悲しくなります。

平田さんに出会い、私の人生は大きく変わりました。大学の卒業論文執筆中、沖縄の国際結婚について調べていると「平田正代」のお名前を何度も拝見し、まさか将来平田さんとご一緒に働ける機会が来るとは思いもしませんでした。卒業後、沖縄女性センター（当時）「てぃるる」で国際結婚や離婚に携わる相談員という職に応募したところ、なんとその面接官のひとりが平田さんでした。人生経験も職務経験も浅い私にチャンスを与えてくださり、本当に一から育てていただきました。国際福祉事務所時代のお話や当時の社会情勢、国籍法改正に尽力した本人からお話を聞くことができたのは本当に幸運なことでした。なかでも、平田さんからお子さんたちの話を聞くのが私は大好きでした。ケースワーク、法廷通訳、翻訳、執筆・・と多忙だった平田さんが一番大切にしていたのが彼らの「マーミー」であることだったような気がします。私が、幼い娘を会合や勉強会に同行する度に、平田さんは「あなたはお利口さんね。お母さんと一緒によく頑張っているね」と娘に声をかけてくださいました。家族の理解や支えがあってこそ自分のライフワークに取り組むことができるのであり、常に家族への感謝の気持ちを忘れない彼女の姿勢がとても印象に残っています。

沖縄、日本、アメリカと境を超えてクライアントを支援する彼女に感銘を受けて、後に私はアメリカでソーシャルワーカーになる道を選びました。私が在米中は、平田さんと毎年クリスマスカードを交換し、度々Eメールやお手紙でやり取りしていました。私がようやく正式にソーシャルワーカーになり、幸いにも沖縄での勤務が決まり、これからは平田さんと直接お会いできるようになるという時に平田さんを失った喪失感で今も胸が締め付けられるような思いがします。誰に対しても公平であり、自分の言動に責任を持ち、どの場においても凛とした彼女は真のリーダーでした。困難な状況でも、平田さんが寄り添ってくださるだけで、安心感と希望を与えてくれました。強く、賢く、たくましく、時に傷つきやすく、そして常に謙虚な彼女は私の憧れの存在でした。平田さんの志を受け継いで、少しでもあなたに近づけるように努めます。

平田さん、またお会いする日まで。

クローバー会と平田先生

真栄田　宏子

“平田先生”と声をかけると優しい顔で返事が返ってくる思いがするこの頃である。半年ぶりにクローバー会があり、平田先生を懐かしみ、先生のことを話し合い、改めてクローバー会の今後を考えているところである。クローバー会とは、語学センターの翻訳クラスで平田先生の授業を受けた生徒３名との月１回の食事会である。もう10年以上も続いているかも知れない。４名なのでいつの頃からかクローバー会と呼ぶようになった。毎月異なるレストランやホテルのランチに行き、食事をしながらおしゃべりを楽しむ。時には英語の勉強をすることもあった。お互いの不得手な分野を補い合うちょっとした勉強会の様子を呈し、それぞれが役割を持つ有意義な会である。長く集まりが続いたのも平田先生がいらっしゃったお陰だと感謝している。また、私達の無茶な翻訳のお願いにも愚痴ひとつ言わず引き受けてくださった。「人のために何かをする」ことが先生の信条で、ご自身のことはいつでも後回しであった。

普段は温和な先生も授業の時は人が変わったように厳しかった。何年も前のことだが授業の様子は今だに覚えている。毎回宿題を提出しなければならず、指名をして英語を読ませたり、訳をさせられたりでいつも緊張して講座を受けていた。先生の日本語訳は見事で、私は日本語表現能力のなさを身をもって知り、早々と翻訳をすることは諦めた。

次世代を担う特に若い女性には、実力で活躍できるようにと先生は発破を掛けておられた。米国留学経験がおありで、福祉のエキスパートの先生は、沖縄の特殊性から生ずる女性や子どもの人権問題などを授業でも時々取り上げておられた。

現役を離れても熱心に活動をなさり、通訳の仕事を引き受けたり何かとお忙しそうで、クローバー会の最中でも電話を受けることが多かった。ご自身の業績について話すことは滅多になかったが、どれだけ多くの沖縄の女性が平田先生に助けられたことだろう。

クローバー会を通して知り得たこともある。ビールが好き、ジュリー（沢田研二）が好きなど意外な面がおありで、俳句もなさっており、生活の様子は俳句から垣間見ることができた。ここ２年程は杖をお使いになり、次から次と病気に悩まされお体も次第に小さく見え始めていた。それでも月１回の集まりには参加してくださった。毎月私達にはお礼のハガキが必ず届き、次回を楽しみにしていると伝えられた。そのハガキを待つ喜びもなくなり寂しい思いである。今頃は天国でビールを飲みながら、ジュリーに「君だけをー」と指をさされ、読書や翻訳をしたり、好きなクラシックを聞いてのんびり楽しんでいることだろう。